慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	沢田允茂氏の「哲学に於ける機械論的説明」について
Sub Title	On Mr. Sawada's "Mechanistic explanation in philosophy"
Author	印東, 太郎(Indo, Taro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.40 (1961. 10) ,p.227- 230
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000040-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論　評

沢田允茂氏の「哲学に於ける機械論的説明」について

印　東　太　郎

編集部からの要請により，沢田氏の論文に対しその読後感を述べる．正直にいつて，科学哲学を除き，純粋に哲学的な論文を読んだのは，私にとり，大学卒業以来これがはじめてではないかと思われる．それだけに教えられるところも非常に多かつたが，同時に，私の理解をこえると思われる箇所も少なくなかつた．以下，一常識人として，気のついた点を列挙する．たゞし，読者が原論文を通読していることは，これを前提としている．文中に氏とあるのは原著者沢田氏をさし，(p. 000) は原論文のページを表わす．なお，筆者の専門は心理学，その中でも，対象としては知覚・思考・知能，方法としては数理解析が専攻である．

(1) 私の誤解でなければ，氏の論旨はつぎのような形に要約されるように思われる．すなわち，人間の歴史や認識，要するに非自然科学的領域 (p. 186) 換言すれば，“主体性”の問題 (p. 209) は，古来，“機械論的”には“説明”され得ないという議論があるが，この場合，主体性とか機械論とか説明とかいうことの内容が問題で，

Ⓐ 新しい機械論的説明によれば，「内面性」としての主体性には特別の問題はなくなり (p. 209—214)，

Ⓑ 実践的行為という意味での主体性に対しては，そこに説明を要求することが，本来，哲学として意味をもたない (p. 214—221)．

これらテーゼの背景には，科学と哲学との関係，ないし，哲学の本務に関する氏独自の思想があり (p. 223)，いずれにせよ，私の容喙すべき問題ではない．編集部が私に期待されたのも，これらの結論に到る道すがら氏の展開された委曲をつくした論証に関する討論であり，これらテーゼそのものの検討ではないであろう．

(2) 新しい機械論とそれによる説明．従来，哲学者が目的論に対して機械論という時の機械は「人間の予め設定したしくみに従つて一定の型にはまつた行動を繰返

えす機械」(p. 188)，すなわち，フィードバックと制御とを内蔵していない機械(p. 195—200) のイメージを前提としており，こういう古典的機械観は，現在の機械の概念からみれば，より広い機械観の一部に過ぎない (p. 200) という氏の主張は，私には当を得たものと思われる．事実，同じ主旨の議論は，私の知つている限りでも，40年以前にすでに行なわれているのである．(註2・3)

自動制御機構を有する現代の機械が，単なる作動の範囲，精度という量的な意味ではなく，より原理的な，質的な意味で，以前のいわゆる“機械的”な機械とはなはだ異なつたものになつているのは事実であり，したがつて，そういう機械のイメージに則つた機械観に立てば，古典的機械観では望み得なかつた事象に対しても，それを機械論的に解釈する余地のひらけて来るという点についても，その限りにおいて，誰も異存のないところであろう．しかし，「人間精神の独自な在り方，すなわち，自由意志や，独創的な直観や洞察，情緒とか良心あるいは歴史的発展」(p. 186) に対して，新しい機械観がどこまで通用するかという，その範囲の問題になると，人々の意見のわかれてくることも明らかであろう．氏の主張は，(1)のⒶに述べたように，「内面性」として主体性に関する問題は，そのすべてに対して，新しい意味での機械論的見方ならこれを適用することができるというように私には受取れた．たゞし，こゝに“適用する”というのは，たとえば，天体の運行が万有引力の法則によつて説明されるというように，法則による事象の予測と，観測によるその検証という具体的操作をいま直ちに含んでいるとは思われないので，この領域に属する個々の事象，たとえば他人の内的経験の理解 (p. 213) も，将来それが具体的操作を伴つて説明されるようにもしなるとすれば，それは新しい意味での機械論的見方の枠を出ない形においてゞあり，それ以外に説明原理は必要としないという意味であろう．もし，上述の意味で，上述のすべての事象に機械論的見方が適用できるというのが氏の結論であるとして，それに対する私の賛否を問われるとしたら，「内面性」としての主性体という意味はよくわからないが，80%は賛成，20%は態度保留と答えざるを得ない．ある意味でこのような信念をもたなければ心理学などやれるものではない．しかし，すべてがそれでつくされるに違いないと，現在，すぐに断定する必要を感じないことも事実で，自ずと事態のはつきりしてくるまで待つてもよいという気がする．この辺が哲学と科学の相違であるかもしれない．多分この文脈に入れてもよいのであろうが，自由意志など，フィードバックの概念を用いても，現代の電子計算機のメカニズムを以てしても，私の知つている限り，それに新しい機械論的説明を考えるにはどのようにして手をつけてよいのか，全く見当がつかないのである．氏の論述には，止むを得ないことであろうが，比喩的にいえば，$a \leq x \leq b$ において，a のごく近傍における $f(x)$ の形から，はるかかなたの $f(b)$ の値を外挿によつて

求めるような感じがあり，いずれ有限個の $f(x_i)$ についてしか論及できないにしても，相当広範囲にわたつて $f(x_i)$ をおさえ，あとを内挿によつて埋める程度にならないと議論に具体性が伴わない気がする．氏自身，次の論文を示唆しておられるので (p. 214)，そこで詳論されることであろう．氏の思想の今後の発展を期待するものてある．

(3) フィードバック概念の導入．氏がフィードバックと制御という概念を新しい機械論の中核に据えておられるのは，現代の常識といえばそれまでであるが，やはり哲学としては斬新な立場であろう．しかし，「あるものが意識をもつといわれるならば，それは必ず何らかのフィードバック系をもつている」(p. 210) というような一般的法則化は，「結果のあるところに必ず原因あり」というようなもので，それ自身として特に学問的に生産的といえるか否か疑わしい気がする．生体内におけるフィード・バック・ループの生理学的・物理学的・化学的構造そのものを探求することが哲学の問題でないことは明らかであるが，「フィードバックと制御を有する複雑な機械という仮説から人間というものをみる時，人間はその具体的な知識の中に論理的なものと認識的なもの，演繹的な動きと確率的・帰納的な働きを，（或いは計算器の領域でいうとデイジタル的要素とアナログ的要素とを）互いに異質的な働きとして，全体としての有機体の知識の働きの構造の中に統合している」(p. 208) というような論述をされるに当り，併せて，そのようなところに認められるフィードバックの具体的な作用のし方を解析して示して頂きたかつたと思われる．それは，勿論，生物物理学の問題でも，そして，多分，心理学の問題でもなく，正しく，哲学の課題というべきであろう．生理学者にとつては，さきに述べたように，生体内におけるフィードバック過程の実質的側面が問題であろうし，心理学者であれば，人間・生物の動作の定量的分析か，あるいは，せいぜい，言語や思考の流れの時系列的構造の解析を通じ，その背後に潜んでいなければならないサーボ・メカニズムの数学的・構造的側面の推定に熱中し，当分，それ以上のことに手がつけられそうにも思われない．氏の指摘されたように (p. 198)，順応，学習といつたような現象になると，制御とフィードバックの存在を前提とせずには理解できないのは事実であるが，このような場合，単にフィードバックの存在を指摘したゞけでは余り足しにならず，それ以上のところにポイントが合わされることになるであろう．しかし，人間的事象において，計測も行なえず，したがつて，具体的な微分方程式はたてられないにしても，そこに含まれるフィードバック機構の成果を論証によつて追求し得る領域があるとすれば，それこそ哲学におまかせするほかない．さらに進んで，フィードバックに伴いがちな振動の現象と弁証法との関連を論じられた箇所 (p. 199–203)，その他において，社会あるいは歴史に対しても，そこにフィードバックの現象を認めておられ

るにように見えるが，いずれにせよ，単なるアナロジーとしてフィードバックという言葉を引合いに出すのに止まらず，無理な注文かもしれないが，そこでフィードバック機構の果している実際の役割を具体的な形で論証して頂けたなら，読者に対する迫力は倍加したように思われる．

(4) 言語の明確な使用．氏の論述の一つの特色となつているのは，言語の内容を明確にわきまえて議論を進められるところであろう．従来の機械論における「機械」という言葉の内容も，“一見，わかつている”ようであるが，実はそうではない点を冒頭に指摘されたのも (p. 188)，(1)のⒷに指摘した似而非問題が“説明”ということの構造と性質に関する見解の不徹底に由来するという解釈も (p. 197)，言語の内容に対する氏の透徹した態度に由来するものであり，その点，私の最も共鳴するところであるが，たゞ，工学における術語を援用する場合に限り，氏のその取扱いは少しく調子を異にするように思われた．フィードバックという言葉の使い方自身にもそのきらいがあり，さらに著しいのはアナログ・ディジタルという言葉の使用であろう．それは(3)の中に引用した文章の中にも現われており，この場合，これらの術語としての意味を知悉している読者は，むしろ，そういう読者の方が，この場合，何がいかなる意味でデイジタルであつたり，アナログであつたりするのか，理解にとまどうのではないかと思われる．

以上，氏の論文において私が感じたまゝの印象を率直に述べた．私は，最近の流行語でいえば，哲学に余り強い方ではないが，それでも，「論理の機械性と機械の論理性」(p. 189—194)，その他の節において氏の展開された卓抜した思想によつて多くを教えられた．しかし，門外漢が論評を求められるとなると，どうしても，自分に納得のゆかないところをあげることにならざるを得ないので，そのような箇所をここに列挙した次第である．これは私自身の経験であり，六代目菊五郎も指摘しているところであるが，とかく非専門家のよせた批評には，専門家の目からみて，とうてい不可能なことを要求している場合が多い．この小篇も，多分，その轍をふんでいることであろう．無理な注文は無理として無視して頂くほかないが，今後の氏の思想の深化発展に対し，この素人の感想が少しでも役立つとすれば，私としては望外の幸せである．

註1　沢田允茂　哲学に於ける機械論的説明．哲学，第38集，1960年．
横山松三郎先生古稀記念論文集．

註2　Köhler, W.　Die physischen Gestalten in Ruhe und im stationären Zustand. Braunschweig, 1920.

註3　Köhler, W.　Gestalt Psychology.（第4章）